

甲虫 No. 60  
ニュース

COLEOPTERISTS'  
NEWS

December, 1982

日本産コフキコガネ族概説(3)

小林 裕 和

Subtribe *Melolonthina* コフキコガネ亜族

日本産属の検索表

1. 触角葉片部は雄では柄部より長く7節からなる。雌では柄部より短く5節または6節からなる。爪は基部近くに内歯を具える……………2
- 1'. 触角葉片部は雄雌ともに3節。爪は先端で切れ込む。尾節板、腹部および中胸腹板の両側は白色または黄色っぽい鱗毛を有する……………X.
- X. ケブカアカチャコガネ属 *Dasylepida* MOSER
2. 背面の色彩は一樣で斑紋を有さない……………3
- 2' 背面には灰色～白色の斑紋を有する…XI.
- XI. ヒゲコガネ属 *Polyphylla* HARRIS
3. 雄の触角葉片部は著しく長く、柄部の3倍以上。触角第3節は短く、第2節の1.2倍。眼は大きく両眼間は眼の幅とはほぼ等長……………XII.
- XII. ケブカコフキコガネ属 *Tricholontha* NOMURA
- 3'. 雄の触角葉片部は、柄部の約2倍。触角第3節は長く、第2節の約2倍。両眼間は眼の幅よりもはるかに広い……………
- ……………XIII.
- XIII. コフキコガネ属 *Melolontha* FABRICIUS
- X. Genus *Dasylepida* MOSER, 1913 ケブカアカチャコガネ属

MOSER (1913) は東南アジアに広く分布する *Leptidiota* 属の中にあつて、BRENSKE (1892) が第8

番目のグループとして分類した小型の一群に、触角の形態や腹面の毛の配列などの特徴から、*Dasylepida* なる新しい属名を与えたとともに、5種をこの属に移し入れ、同時に1種を新種として記載した。現在までに中国、台湾、トンキン、日本などから7種が知られている。そのうち、我国からは次の1種が知られている。

1. *Dasylepida ishigakiensis* (NIJIMA et KINOSHITA, 1927) ケブカアカチャコガネ

体長：14～19mm。体は赤褐色。背面は黒あるいは暗褐色。触角は10節で雄の葉片部は柄部よりやや長い。背面は密に点刻される。頭部の後半および前胸背の前縁と後縁には長い直立した軟毛を装う。

分布：琉球列島(石垣島、西表島)

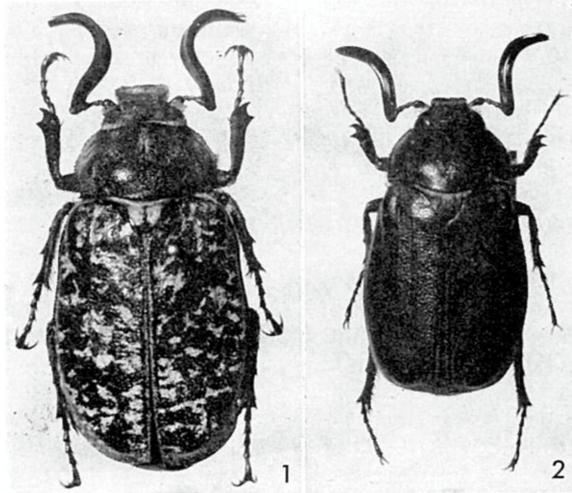
XI. Genus *Polyphylla* HARRIS, 1842

ヒゲコガネ属

本属は主に旧北区および北アメリカを中心とした地域に広く分布し、現在までに約45種が記載されている。我国には次にあげる3種が知られている。

種の検索表

1. 上翅には各3条の白色縦條を有するが、時として、ほとんど消失する。前脛節には雄では1外歯、雌では2あるいは3外歯を具える……………2
- 1'. 上翅には灰白色～白色の不規則な形をした斑紋を有する。前脛節には雄では2外歯、雌では3外



1. *Polyphylla laticollis* LEWIS ヒゲコガネ  
2. *Tricholontha papagena* NOMURA ケブカコフキコガネ

- 歯を具える。体長31~39mm. .... *laticollis* LEWIS
2. 雌の前脛節には2外歯を有する。前胸背の側縁は中央で曲り、後半部ではほとんど真直。体長24~32mm. .... *albolineata* (MOTSCHULSKY)
- 2'. 雌の前脛節には3外歯を有するが、第3歯は時として不明瞭。前胸背の側縁は中央で強く曲り、後半でやや湾入する。体長25~30mm. .... *schoenfeldti* BRENSKE

1. *Polyphylla laticollis* LEWIS, 1887 ヒゲコガネ  
 我国に産するコガネムシの中でカブトムシを除けば体は最も大型で、雄の大きな触角とも合わせ、よく知られている種である。

LEWIS は模式産地を「Sakami」とし、富士山と横浜の間に位置する場所であると書いている。このSakami は恐らく相模の誤りであり、たぶんその場所は、本種がよく採集されていた藤沢付近ではなかったかと想像される。本種には日本に分布する原名亜種の他にも、朝鮮から中国大陸にかけて分布する別亜種が知られている。

分布：日本（本州，四国，九州）。

2. *Polyphylla albolineata* (MOTSCHULSKY, 1861)  
 シロスジコガネ

本種は最初、雄の前脛節に1歯あるだけであること、上翅に白い縦條を有することなどの特徴からMOTSCHULSKY (1861) によって *Granida albolineata* という新属・新種として発表されている。彼の創設した *Granida* 属は、我国においても長いこと使われてきたが、真の *Polyphylla* 属の中にも前脛節に1歯だけしかないものがインドやヒマラヤに産し、上翅の斑紋でも北アメリカに産する *Polyphylla* 属の大部分の種にも同じような斑紋が見られるなどの点から考えて、MOTSCHULSKY のいう *Granida* 属は本属の中にも含められるものと考えられる。

分布：日本（北海道，本州，伊豆諸島，四国，九州）。

3. *Polyphylla schoenfeldti* BRENSKE, 1890  
 オキナワシロスジコガネ

本種は、SCHONFELDT が奄美大島で採集した雌個体によって記載されたが、LEWIS (1895) は *albolineata* のシノニムとして扱っている。また、沢田 (1950) はそれまで同一種として取り扱われてきた日本、琉球列島および台湾産の個体についてふれ、琉球列島および台湾に産するものをそれぞれ *albolineata* の別の亜種として取り扱っている。一方、野村 (1959) は琉球列島に産するものを独立種として扱い、その扱いが現在まで続いている。本種を *albolineata* の亜種とするか、独立種とするかについては、多少問題が残るとはいえ、本種が LEWIS のように *albolineata* と全く同一のものであるという考え方には同意できない。

分布：琉球列島（奄美大島，徳之島，沖永良部島，与論島，沖縄本島，久米島），トカラ列島（宝島）。

Ⅶ. Genus *Tricholontha* NOMURA, 1952 ケブカコフキコガネ属

後述の *Melolontha* 属に極めて近い属と考えられるが、雄の触角葉片部は非常に長く、強く湾曲し、触角第3節は長く伸長せず、眼が非常に大きいことなどで区別することができる。現在までに模式種である次の1種が知られているのみである。

1. *Tricholontha papagena* NOMURA, 1952

ケブカコフキコガネ

体長：28~29mm. 沖縄本島の本部で採集された1頭の雄の標本に基づいて、新属・新種として記載された。原記載以降、採集の記録は見当たらないが、3月に（原記載に用いられた標本は8月に採集された）比較的多くの個体が得られる。筆者は残念ながらまだ雌個体を見ていない。

分布：琉球列島（沖縄本島）。

XIII. Genus *Melolontha* FABRICIUS, 1775 コフキコガネ属

旧北区を中心にその他インドシナ地域などから現在までに、約75種程が知られている。ほとんどの種類では、色彩は単色で変化に乏しいが、外部形態ではいろいろな部位で地域や個体による変異が大きく、この事がこの属に含まれる種の決定を難しくしている一因ともなっている。

我国には、現在のところ次にあげる6種類が記録されているが、種によってはかなり変異の幅が大きく、今後検討を加える必要があると思われる。

ここでは種の取り扱い方については、現在使われている学名をそのまま踏襲することとしたが、前述の通り変異の幅が大きいためにつきりとした形に検索表をまとめることが極めて困難である。現在、筆者の手許には約400余頭の本属の標本があるが、これらの標本の変異内で、また、種の特徴をよく表している個体だけについて検索表を作成してある。特にその旨を含んだ上で次の検索表を利用していたきたいと思う。

#### 日本産種の検索表

1. 体毛は灰白色。または、やや黄色味を帯びた灰白色..... 2
- 1'. 体毛は黄褐色。時として、やや白っぽい黄褐色..... 4
2. 後胸突起は太く、前方にあまり突出せず、先端は鈍い..... 3
- 2'. 後胸突起は幅が狭く、前方にかなり突出し、先端は鋭い。体長28~30mm ..... *tamina* NOMURA
3. 頭楯の両側は、ほぼ平行かまたは前縁角近くでなだらかに狭められるが、後半では狭まらない。前縁は、雄ではほぼ直線状。雌では中央でやや湾入する。前頭の点刻はほとんどの個体でしお状となる。腹節両側の白斑は小さく、腹節の幅の1/2以下。尾節板は、雄では基部の幅と長さが等しいか、やや基部の幅の方が狭い。雌では基部の幅の方が長さより広い。体長25~32mm..... *frater* ARROW
- 3'. 頭楯の側縁は基部から前方に向ってわずかに狭まる。あるいは、ほぼ両側が平行。前縁は雄では

わずかに弧状となるか、あるいはほぼ直線状。雌では中央でかなり明らかに湾入が認められる。前頭の点刻はしわ状とならないか、時として点刻を欠く縦線を具える。腹節両側の白斑は、前種に比べ大きく腹節の約1/2かそれ以上となる個体が多い。尾節板は、雄では長く、先端近くで急に狭まる。雌では、基部の幅と長さがほぼ等しいか、あるいはやや基部の幅の方が狭い。前種に比べ基部の絶対的な幅が狭いものが多い……………

- …………… *masafumii* NOMURA  
 4. 雄の触角葉片部は、ほとんどの個体で湾曲する。多くの個体では前脛節の第2歯は明瞭であるが、時として第2歯が痕跡的となる。尾節板は雄では短いか、やや長いが先端はほとんどの場合湾入しない。雌では幅が広く、正三角形に近い……………

- …………… *japonica* BURMEISTER  
 4. 雄の触角葉片部は、ほとんどの個体で湾曲しない。前脛節の第2外歯は痕跡的であるが、時として明瞭な第2歯を具える……………

- …………… *satsumaensis* NIJIMA et KINOSHITA  
 a. 尾節板は雄では長く、通常先端近くで急に狭まり、先端はかすかに湾入するか円い……………  
 subsp. *satsumaensis* NIJIMA et KINOSHITA  
 b. 尾節板は雄では長く、通常先端近くで急に狭まり、先端は明らかに湾入する……………

- …………… subsp. *shikokuana* NOMURA  
 1. *Melolontha tamina* NOMURA, 1964 アマミコフキコガネ

本種は、奄美大島の赤木名で採集された1頭の雄、および徳之島の亀津で採集された1頭の雌の標本を基に記載された。その後、喜界島でも分布が確認されている。

本土に産する *M. frater* および、先島諸島に産する *M. masafumii* とは非常に近い関係にある種であるといえる。

分布：琉球列島（奄美大島、徳之島、喜界島）。

2. *Melolontha frater* ARROW, 1913 オオコフキコガネ

本種は他の日本産の1種である後述の *M. japonica* BURMEISTER（コフキコガネ）と比較的似ていることから学名の扱ひ方について一時期混乱が生じたことがある。この経緯については、野村（1952）がかなり詳しく述べているので、ここではその一部を引用する形で紹介しておきたい。

『……最初他の1種に BURMEISTER は *M. japonica* と命名し、その後 HAROLD は *Hoplosternus japonicus* なる種を記載した。その後 WATERHOUSE は本種の学名に *H. japonicus* HAROLD を採用し、以後、松村（1906）等によりその名が用いられてきた。その後、MOSER は *M. japonica* BURMEISTER を *Hoplosternus* 属に移し、*H. japonicus* HAROLD を異物同名としてこれに *H. haroldi* なる名を与えた。しかし、HAROLD 自身 *H. japonicus* HAROLD は *H. japonica* BURMEISTER と同種であることを認

めていたので、ARROW は *H. japonicus* HAROLD を *M. japonica* の同物異名とし、新しく本種に *M. frater* と命名記載した。その後、TESAR は *Hoplosternus* 属を採用、本種の学名に *H. haroldi* MOSER を用いているが、MOSER の *H. haroldi* には記載がなく、ただ学名の変更であり、*H. japonicus* HAROLD その物であり、*H. japonicus* は HAROLD が自身認めているほか、その記載を読んでも *M. japonica* と思われるので、やはり ARROW の種名を採用すべきであると思う。……………』

本種は、分布が広く、我国に産する原亜種の他にも、朝鮮、北部中国と台湾にはそれぞれ別亜種が知られている。

分布：日本（本州、伊豆諸島、四国、九州、屋久島）。

3. *Melolontha masafumii* NOMURA, 1952 オキナワコフキコガネ

石垣島で採集された2頭の雄の標本を基に記載された。分布が確認されている地域の中では宮古島での採集例は、あまり多くないようであるが、模式産地である石垣島やその他西表島ではかなり多数の個体が5月～6月にかけて採集されている。

学名は、命名者である野村氏の子息で幼くして事故死した真史君に献名されたものである。

分布：琉球列島（石垣島、西表島、宮古島）。

4. *Melolontha japonica* BURMEISTER, 1855 コフキコガネ

本種は、前述のオオコフキコガネとの間で一時学名の上で混乱した時期があったが、前にも示したように HAROLD が *H. japonicus* と命名した種および、MOSER が *H. haroldi* と命名した種はいずれも本種と同一のものである。

本州においては、前述の *frater* が主に海岸に近い場所で採集されるのに対して、本種は河川などの砂地が見られるような場所では、かなり山地にまでその生息域が広がっている。

本種は地域変異が著しく、とりわけ尾節板の形態および後胸突起の形態がかなり変化することはすでに知られている。そのほかにも、前脛節の形態や雄触角葉片部の形態などについても地域差および個体差がかなり見られる。多くの個体を調べていくと、次に述べる *satsumaensis* との明確な境界線を引くことが極めて難しいことに気づかれると思う。

分布：日本（本州、伊豆諸島）。

5. *Melolontha satsumaensis* NIJIMA et KINOSHITA, 1923 サツマコフキコガネ

本種は、鹿児島産の2雄、8雌、および宮崎県高産の1雄、高知県本山産の1雄の標本を基に記載されている。また、TESAR（1938）は雲仙産の個体を基に、新島・木下が原記載に用いた雄交尾器の図と比較して、その形態が異なるという理由で *kinoshitai* なる種を記載しているが、これは本種と同一のものであると考えられる。現在本種は、次に示すような2亜種に区別されている。

subsp. *satsumaensis* NIJIMA et KINOSHITA, 1923, s. str.

基本的には、雄の前脛節は1歯を具え、第2歯は痕跡的であるが、九州各地ではかなりはっきりした第2歯を持つ個体が、多くの基本型に混って見出される。また、屋久島では、明らかな第2歯を持つ個体がかかり見られる。ところが、この第2歯がはっきりした個体も雄交尾器の形態は、同一産地のものであれば基本型のそれと何ら区別できない。また、尾節板の形態にも相当な変異が見られる。

分布：日本（九州，屋久島，種子島）。

subsp. *shikokuana* NOMURA, 1977 ショッコフ

キコガネ

愛媛県今治を模式産地として、全体で12頭の標本を基に記載されている。原名亜種との大きな違いとして尾節板の形態および前脛節の形態があげられている。しかしながら、模式産地産の多数の個体について調べてみると、その中でさえかなりの個体変異が見られることが判る。今後、四国およびその周辺地域の多くの標本と比較検討してみないとわからないが、この亜種の位置づけについては、若干の疑問が持たれるように思う。

分布：日本（四国）。

(東京都練馬区)

### ○ミクラミヤマクワガタに現れた触角の異常2題

最近採集されたミクラミヤマクワガタ *Lucanus gamunus* SAWADA et WATANABEの中に、触角に異常が認められる下記の雄2頭が見出されたので報告しておく。貴重な標本を託された採集者の金子順一郎、長谷川道明の両氏にお礼申し上げる。

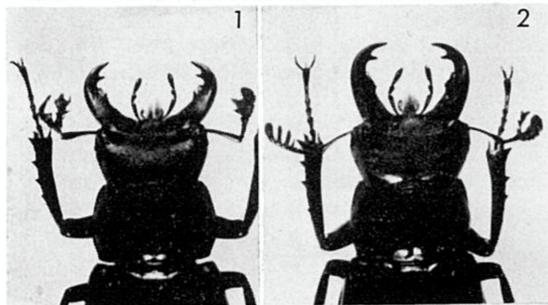
1♂，御蔵島黒崎高尾，7. vi. 1981，金子順一郎採集（写真1）。

右触角の第6節より末端までが癒着し、やや膨大して不規則な形を呈する。左触角は第3節付近より枝分れし、それぞれ癒着して形状も複雑になる。

1♂，御蔵島南郷，27. v. 1982，長谷川道明採集（写真2）。

右触角にのみ異常が見られ、本来の鰓状球部は癒着し萎縮しているが、やはり第3節付近より細く鋸歯状を呈した4節が枝分れしている。

なお、上記の2頭とも地表を歩いていたものを採集した由で、触角以外は正常な個体と全く変りない。



(東京都港区，境野広行)

### ○九州のアイヌコブスジコガネ

筆者は以前に今坂正一氏と一緒に島原半島よりアイヌコブスジコガネ *Trox aino* NAKANE et TSUKAMOTO を九州初記録として報告したが、熊本県阿蘇山の標本があるので追加しておきたい。

1頭，熊本県阿蘇西口，29. vi. 1978，榎原 寛採集。

有料道路の料金所近くの灯火で採集された由。貴重な標本をご恵与下さった榎原 寛氏に心をらお礼申し上げます。(大阪府池田市，越智輝雄)

### ○ヒメクシコメツキの記録3例

ヒメクシコメツキ *Melanotus (Melanotus) legatoides* KISHII, 1975は、屋久島から新潟県にかけて広く分布することが知られている。筆者は、いまだ記録のない北海道・神奈川県・埼玉県などから採集された本種を検査することができたので、ここに新産地として付け加えておく。

1♂，北海道中川郡中川町，7. viii. 1975，藤田宏採集；神奈川県箱根塔ノ峰，1♂，22. viii. 1982，前波鉄也採集；1♂，埼玉県正丸峠，15. viii. 1971，小林裕和採集。

本種は、屋久島では比較的普通であるが、本州では数が少ないようである。

末筆ながら、標本その他でご協力いただいた前波鉄也・小林裕和・藤田 宏らの諸氏に深くお礼申し上げます。(東京農大，鈴木 互)

### ○礼文島のミズギワゴミムシ類 (ミズギワゴミムシ分布資料，1)

本年(1982年)の7月に筆者は北海道礼文島を訪れミズギワゴミムシ類を採集する機会を得た。同島からの記録はあまりみられないのでここに報告する。

1. イノウエマダラミズギワゴミムシ *Bembidion (Eupetedromus) inouyei* HABU

1♀，久種湖，2. vii. 1982.

2. ヒメマダラミズギワゴミムシ *B. (Notaphus) fasciatum* (MOTSCULSKY)

1♀，久種湖，2. vii. 1982.

3. ヨツボンミズギワゴミムシ *B. (s. str.) paediscum* BATES

2♀♀，深香，1. vii. 1982.

4. チシマミズギワゴミムシ *B. (Peryphus) dolorosum* (MOTSCHULSKY)

9♂♂，7♀♀，香深，3. vii. 1982.

5. カギモンミズギワゴミムシ *B. (P.) captivorum* NETOLITZKY

2♀♀，久種湖，2. vii. 1982；3♂♂，6♀♀，香深，3. vii. 1982.

6. ヨツアナミズギワゴミムシ *B. (Plataphodes) tetraporum* BATES

11♂♂，20♀♀，香深，3. vii. 1982.

(東京都港区，森田誠司)

## シイバナガゴミムシについて

笠原須磨生\*・今坂正一\*\*

シイバナガゴミムシ *Pterostichus shiibanus* HABU は宮崎県東臼杵郡椎葉で採集された1頭の雄に基づいて1958年に記載されたが、筆者らの知る限り以後追加の記録が無く、雌は未知のままであった。

今坂は1982年8月、本種の模式産地に隣接する熊本県八代郡五家荘でベイトトラップにより若干のナガゴミムシ類を採集したが、そのうちの3頭の雄は個体的・地理的変異と思われる軽微な相違があるものの基本的には *shiibanus* の原記載とよく一致し、模式標本とも比較検討して本種の雄であることを確認した。同時に得られた1頭の雌は、雄個体との形態的相似により本種の雌と認められる。

そこで、新産地の記録もかねて、この珍しいナガゴミムシを主として五家荘産の標本に基づいてここに紹介し、九州山地における本種の分布状況が今後さらに明らかにされることを期待したい。

本文に先だって、模式標本を実検する機会を与えてくださった農業技術研究所病理昆虫標本館の長谷川仁先生ならびに多くのご指導を頂いた国立科学博物館の上野俊一博士に心から感謝の意を表したい。また、熊本県五家荘附近の地理と昆虫相についてご教示を頂いた大塚 勲氏に厚くお礼申し上げる。

### シイバナガゴミムシ

*Pterostichus shiibanus* HABU, 1958. *Kontyû*, Tokyo, 26:70~72, figs. 2, 5.

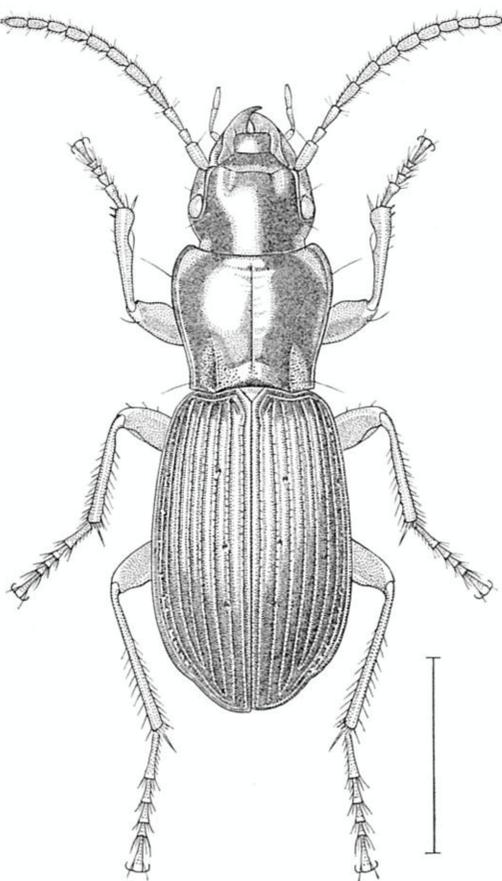
五家荘産個体群による再記載。体長:3♂(計測個体の順序は以下同前, 単位mm) 14.4:14.9:15.0, 1♀15.4; 体幅:3♂, 4.75:5.00:5.10, 1♀, 5.25。黒色で光沢があり、雌の鞘翅は光沢が鈍い。口鬚・触角・脚は暗褐色、頭楯前縁・上唇・大腮も赤みがある。今回得た雌個体はやや未熟なためか頭部を除き全体に赤みがある。

頭部はかるく隆り、頭頂は広く、滑らか、きわ

めて微細な点刻がまばらに認められる。前頭溝は幅広くやや浅いが、深淺には変化があり、推葉産模式標本は特に浅く不明瞭。側縁条溝は深く、複眼の少し後方まで伸びる。複眼は小さく、脹みも弱いが、雄個体にはより明らかに脹むものもあり変化がある。こめかみは複眼とほぼ同長か少し短く、わずかに脹むものまで変化がある。頬はかすかなしわが認められるが、ほとんど滑らか、口裂に沿って短いしわがある。複眼上の後方刺毛は複眼後縁に位置し、側縁条溝と少し離れている。触角第2節の刺毛は下面に1。

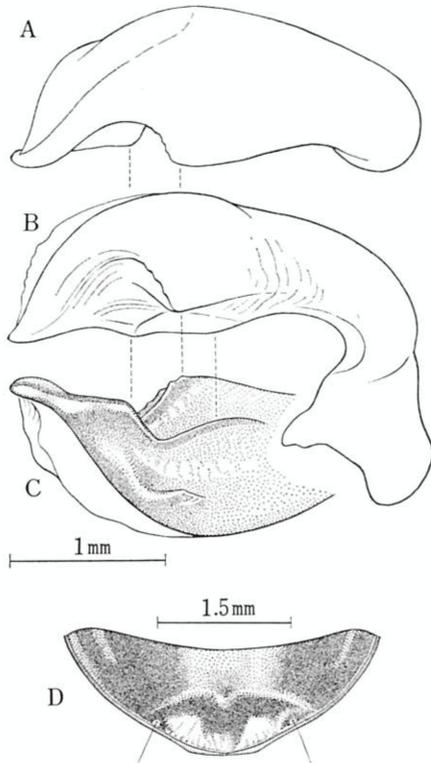
前胸背は適度に中高。側縁の前後への狭まりがやや弱く四角い感じに見える。前方から1/3で最も幅広い。前胸幅/頭幅は(3♂)1.27:1.29:1.29, (1♀)1.27, 平均1.28, 前胸幅/前胸長は(3♂)1.25:1.27:1.23, (1♀)平均1.20。前縁と後縁は同幅。前縁はかるく湾入し、前角は丸く、少し突出する。後縁は中央部がかるく湾入し、両側はほぼ平らかわずかに斜め、後角はほぼ直角かそれに近い鈍角、先端は丸い。側縁は前後に等しく緩やかに狭まり、後角の前方1/5~6でわずかに波曲、後角までの間に数個の刻み目がある。側縁の上反は幅狭く、前方で少し拡がる。側縁の刺毛は前方1/5と後角の前方に少し離れて各1。表面は滑らか、かすかな横しわと微細印刻が認められる。前後の横溝は浅く、前方のそれは深淺に変化がある。正中溝は深く、後端部でより深まる。基部凹陷はやや深く、最深部は幅広い縦溝状、前方へわずかに開き、しわ状に荒い点刻があ

る。凹陷の外側は少し隆り点刻され、内側の基部横溝の後方は滑らかでまばらに点刻され、正中溝の後端にはやや密に小点刻がある。翅鞘は適度に中高、長卵形、中央のやや後方で最も幅広く、合会部は癒着して開かない。翅鞘幅/前胸幅は(3♂)1.18:1.19:1.20, (1♀)1.25, 平均1.21。



第1図 シイバナガゴミムシ *Pterostichus shiibanus* HABU, ♀. (Scale: 5.0mm)

翅鞘長/前胸長は (3♂) 2.50:2.45:2.38, (3♀) 2.43, 平均 2.44。翅鞘長/翅鞘幅は (3♂) 1.68:1.62:1.61, (1♀) 1.62, 平均 1.63。基縁は斜めで側縁との会合部は鈍角。翅端前側縁の波曲は明瞭。翅端は丸く、会



第2図 シバナガゴミムシ *Pterostichus shiibanus*

HABU

A, 雄交尾器陰茎上面; B, 同右側面;  
C, 同下面; D, 雄腹板末節。

合部でやや角ばる個体もある。条溝は深いむしろ幅広く、刻み目状に点刻されて特徴的。間室は雌より雄でやや強く隆まり、変化がある。点刻は無く、微細印刻は雄では弱く、横長から等径状まで変化があり、雌では等径状で条溝底部まで強く刻印され、このために翅鞘の光沢が鈍い。推葉産の模式標本は第1条が基部孔点に達し、基部小条も第1条に連結しているが、五家荘産の個体は全て第1条は基部小条に連結しているだけで、基部孔点からの条溝は長短に変化はあるが第1条とは切れている。第3間室の孔点は3。第1孔点は前方1/5で第3条に接し、第2・3孔点は中央・後方1/3で第3条に接している。側縁部の孔点群は16~18、中央部はまばら。

中・後脚の第1~3跗節は外側に溝がある。

腹面は前胸腹板突起の中央が浅く縦溝状に凹み、先端は縁取られる。前胸腹板の内側は弱くまばらに点刻され、中胸腹板・同側板・後胸腹板側部・同前側板・腹部腹板第1~2節・同第3節側縁部は密に点刻される。腹板全節の側縁部には浅い凹みがある。雄腹板末節は単純、中央に低いやや明瞭な隆起部があり、そこから後縁にかけて圧下され、縁取られた先端縁は切断状(第2図)。

雄交尾器陰茎は短く強壯。基方1/3で強く彎曲し、先方で右側面から下面にかけて深く半円形にえぐられ(第2図A, B), 下面中央にS字型の著しい竜骨状隆起があり、左側開口部の下面にも縦隆がある(第2図C)。先端片は三角形で先端は小さく丸い。右側片は *pachinus-sphodriformis* 種群のそれに似て短く、先端は丸い。雌交尾器については残念ながら今回得られた標本の腹端内部が欠損していて検することができなかった。

検視標本: 1♂ (Holotype), Shiiba, Miyazaki Pref., 23. ix. 1950, A. HABU leg.

3♂♂, 1♀, 熊本県八代郡五家荘葉木, 8. viii. 1982, 今坂正一採集。

(\*千葉県船橋市・\*\*長崎県島原)

### ○宮古島から採集されたヒゲナガゾウムシ

筆者は最近、宮古島へ渡島された斉藤秀生・明子御夫妻の御好意によって同島産のヒゲナガゾウムシの恵手を受けたので、ここに記録し斉藤御夫妻の御好意に報いたい。

1) コーヒーヒゲナガゾウムシ *Araecerus fasciculatus* (DEGEER, 1775)

2頭, 沖縄県宮古島城辺町友利, 4. x. 1982, 斉藤秀生・明子採集; 1頭, 城辺町長山, 6. x. 1982, 斉藤明子採集。

2) アトホシヒメヒゲナガゾウムシ *Exillis japonicola* NAKANE, 1963

1頭, 城辺町友利, 4. x. 1982; 10頭, 平良市西原, 4. x. 1982, 斉藤秀生・明子採集。

なお, *Araecerus* 属に含まれる種で、種の同定にまで至らなかった標本(ハワイ原産の *A. varians*

JORDAN 及び石垣島原産の *A. ishigakiensis* MORIMOTO に酷似する種)も検視している。

(東京農大, 妹尾俊男)

### ○アサヒナルリナガタマムシの記録

アサヒナルリナガタマムシ *Agrilus asahinai pseudorotundicollis* Y. KUROSAWA, 1956 は京都市芦生産の雌に基づいて記載されたものであるが、かなり珍しいものようで、その後は岐阜県美濃市須原が記録されているにすぎない。最近、岩田隆太郎・隈本秀樹両氏より頂いたタマムシの中に各1♀が含まれていたので記録しておきたい。両氏に御礼申し上げる。

1♀, 27. v. 1977, 京都府美山町京都大学芦生演習林, 岩田隆太郎採集; 1♀, v. [1982], 滋賀県甲賀郡油日, 隈本秀樹採集。

(兵庫県宝塚市, 遠山雅夫)

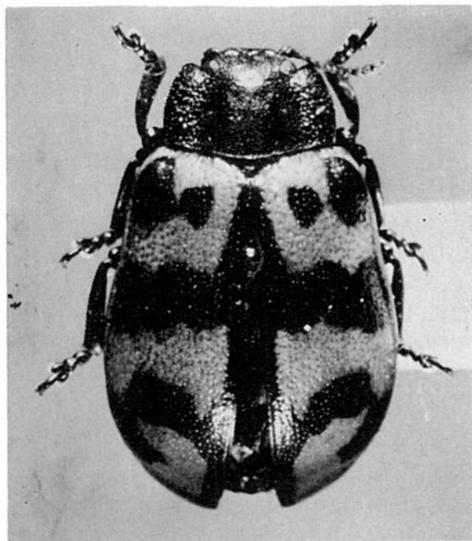
## ○北海道定山溪のウズマキハムシ

筆者の1人、石崎は1979年6月20日に北海道定山溪でウズマキハムシ *Chrysomela lapponica* (LINNÉ, 1758) を1頭採集した。本種はすでに田辺秀男氏によって、定山溪の一部である札幌市豊平峡で撮影された見事な生態写真が発表されている(田辺秀男, 1979, 北海道の昆虫, p. 148) が戦後のわが国の図鑑類には出ていない珍種なので、ほとんど同じ産地ではあるが記録しておく。

1頭, 北海道札幌市定山溪, 20. vi. 1979, 石崎宏矩採集。

ヨーロッパではヤナギ, ポプラ, シラカンパなどの葉を食害することが知られており, 田辺氏はハンノキの葉上で発見したと記しておられる。石崎採集のもの食樹は不明である。

木元新作博士の御教示によれば, 本種は古くは河野・玉貫, 1926が樺太から記録し(動物学雑誌, 38, p. 288), さらに松村, 1931が日本昆虫大図鑑(Fig. 716, p. 282) に図説している。河野・玉貫は *Melasoma lapponicum* LINNÉ の名の下にウズマキハム



シという新名を付して, 南および樺太から記録し, 他にヨーロッパ, シベリヤを分布地にあげている。また, 松村は *Melasoma lapponica* とし, 同じ和名を付し, 「これは樺太に産する普通種なり」と記し, 分布地にヨーロッパ, シベリア, 樺太の他に中国もあげた。

日本からは, JUNK の甲虫目録の中で WEISE, 1916が本種の分布地に Japan を挙げ, 同じく WINKLER の旧北区の甲虫目録にも Japan が挙げられている(1930) が, 当時は樺太も台湾も Japan に含まれることがあったので, これらは正確な日本本土からの記録とは見做し難い。ただし, WEISE, 1916の記録は玉貫・河野の記録よりも10年も先であ

る点に注意しなければならない。日本本土から本種を最初に記録したのは中条道夫・木元新作両博士で, 1961年の日本産ハムシ科の目録の中で Japan(Hokkaido) と記してあるが, 詳しい産地の記録はない。北海道では, 本種は大雪山周辺地方で稀に採集されていたが, 正確な記録はなく, 北海道内の正確な記録は, 江崎悌三博士(1964) による十勝国足寄村が最初である。本種が北海道の石狩低地帯以西にも分布することを初めて記録したのは上記の田辺秀男氏(1979) である。

末尾ながら, 種々有益な御教示を頂いた木元新作, 大野正男両教授に厚くお礼を申し上げる。

(名古屋大学理学部, 大沢省三・石崎宏矩)

## ○アオグロナガタマムシの食樹

アオグロナガタマムシ *Agrius viridiobscurus* の食樹については, 現在まで確実な報告がなかったようであるが, 筆者は, 下記のように羽化脱出した標本を所持しているので報告したい。

1頭, 奈良県春日山, 10. v. 1982, イヌシデより羽化脱出, 細川浩司採集。

末筆ながら, 貴重な標本を提供された細川浩司氏に深謝する。(東京都港区, 伊藤 武)

## ○カワラハンミョウを東海村田向海岸で採集

1982年8月25日, 茨城県東海村の動力炉核燃料事業団付近の田向海岸で, 夜間懐中電燈をつけて夜行性甲虫類を採集していたところ, カワラハンミョウ *Cicindela laetescripta circumpectula* W. HORN 1頭を得た。採集した場所は汀線から150mほど離れたまばらに海岸植物(種名不明)が生えた所で, 地上に静止していた。この辺りの砂浜は幅広く, 九十九里浜や鹿島浦に較べ雄大であり, 車輛の通った跡はあるが自然状態がよく保たれているので, 時期を選んで来れば多数発見できるかも知れない。

終りに, いろいろご教示いただいた同行の笠原須磨生氏にお礼申しあげる。

(千葉県市川市, 山崎秀雄)

## ○クロサヒラタアトキリゴミムシ鹿児島県の記録

標題の *Parena kurosai* HABU は原産地の東京都浅川の他に千葉, 兵庫, 岡山, 山口各県で記録されているが, 九州南部では知られていなかったと思うので, 筆者の手元にある標本を記録しておく。

1♀, 鹿児島県始良郡栗野牧場, 15. v. 1982, 石塚勝己採集, 叩き網による。

本種は, オオヨツアアトキリゴミムシ *P. perforata* (BATES) によく似ているが, 翅鞘の条溝はより深く明瞭; 第3間室の孔点数は3で後者は4; 交尾器の相違は雌において顕著で, 尾状突起先端節の棘が左右2群に分かれ, 後者はほぼ均等に並ぶ。

末尾ながら貴重な標本をご恵与くださった石塚勝己氏に厚くお礼申し上げます。

(千葉県船橋市, 笠原須磨生)

## ○ムナコブハナカミキリの福井県での記録

九州大学の森本博士が所用で福井県に來訪し、その機会に採集もして行きたいというので、1982年6月25日、福井県今庄町木の芽峠へ案内した。天候不順で収穫は多くなかったが、木の芽峠から鉢伏山へ向い、山頂の小休止のおり、森本博士の殺虫管に入っていたのは、何と福井県未記録のムナコブハナカミキリ *Xenophyrama purpureum* BATES (♂) であった。のち、この標本は保管を委ねられ、現在、筆者の手許にある。記録するにあたり森本博士の御厚意に深謝する。(福井大学、佐々治寛之)

## ○テンリュウメダカチビカワゴミシ山梨県の記録

テンリュウメダカチビカワゴミシ *Asaphidion tenryuense* HABU, (1954) は長野県飯島村において採集された1頭の標本に基づいて記載された種で、採集場所は天竜川の川原で、ゴミの下から得られたものである。また、トカラ列島には別亜種 *A. tenryuense konoi* UENO (1955) が産する。

原名亜種 *tenryuense* は、その後、大阪府、神奈川県および新潟県で記録されたが、最近における記録はなく、その詳しい棲息場所も不明のままである。

今回、筆者らは南アルプス産の本種を検査することができたので報告しておく。

山梨県韮崎市ドンドコ溪谷(標高約1,700 m) 1頭、12. v. 1982、長谷川道明採集。

本個体は、溪流わきの石の下から得たもので、こ

の付近から同属の普通種メダカチビカワゴミシ *A. semilucidum* も共に採集することができた。しかしながら、同地で再度採集を試みたが得られず、この1個体だけでは、ここが本来の棲息場所であるかどうかはわからなかった。なお、*A. semilucidum* は溪流付近に限らず、いろいろな環境(砂地、草地、湿地および樹皮下など)で普通に見られる。

(東京農大、松本俊信・長谷川道明)

## ○台湾中北部におけるアカサビコメツキの記録

アカサビコメツキ *Lacon mausoni* HAYEK, 1973 は、Tonkin と台湾に分布することが知られている大変美しいコメツキムシである。本種はめずらしい種のように台湾からは中部の台中県(OHIRA, 1968, *Sulcilacon sanguineus* FLEUTIAUX という名で記録)と南投県(鈴木, 1979)から2♂♂1♀の記録があるにすぎない。筆者は最近新たに4個体の標本を台湾北部と中部から検査する機会を得たのでここに記録しておく。

1♀、南投県南山溪、7. iv. 1980、下村 徹採集；1♀、同上、25. iii. 1981、下村 徹採集；1♂、宜蘭～桃園県池端～四陵、2. iv. 1981、下村 徹採集；1♂、桃園県四陵、6. iv. 1981、下村 徹採集。

文末ながら、大変貴重な標本をご恵与下さった下村 徹氏に厚くお礼申し上げる。

(東京農大、鈴木 互)

## &lt;新 著 紹 介&gt;

IABLOKOFF-KHNZORIAN, S. M. 1982. Les Coccinelles, Coléoptères—Coccinellidae. Tribu Coccinellini des régions Paléarctique et Orientale. 568 pp., Société Nouvelle des Editions Boubée, Paris.

旧北区および東洋区の Coccinellini 族テントウムシ類 (Psylloborini 族を含む) のモノグラフである。著者は本誌第50号に紹介したように、1979年に旧北区の当族の属の再検討を行ない、大幅な学名の変更を断行したが、その具体的な成果としてまとめられたのが本書である。1979年の論文でも種のリストにはかなりの東洋区のものを含めていたが、この著書では完全に両区のものを対象とし、種数もふえている。72頁までの序文と総論のあと、470頁の分類本文で、47属274種を取扱い、3新属と9新種を含み、ほとんどの種について、斑紋を示す背面図と雄交尾器の図を付している。また、各種ごとの references には、幼虫や習性などの文献もあげてあり、親切である。図は104に及ぶがほとんどが1頁を占めているので、一般にいう図版といってよい。世界各地の博物館などから標本を借り、かなり入念にタイプ標本の検討を行っている割には、新種が少ないのは不思議である。既知種の検討に終始して、未整理標本にはあまり手をつけなかったのかも知れないが、そうであれば、折角の大著だけに残念である。

1979年の論文紹介の中でも、いくつかの承服しがたいシノニムがなされていることをあげたが、今回、新たに、クロスジチャイロテントウ *Mi-rasptis kiotoensis* NAKANE et ARAKI が *M. inops* MULSANT の、ムナグロチャイロテントウ *M. satai* MIYATAKE とムモンチャイロテントウ *M. kurosai* MIYATAKE がチャイロテントウ *M. discolor* F. のシノニムに取扱われている。果して現物を検しての処置か疑問もたれるが、各地のテントウが同じような概念でシノニムに落されているとしたら問題である。

この類の便利な手引書として MADER (1926-37) の旧北区テントウムシ類図説 I (現在の Epilachninae と Coccinellinae を含み、IIでその他を簡略にまとめ、1955年発行) があり、多数の斑紋変異型を網羅したカラー図版がつき重宝のものであったが、肉眼的特徴が主体で、かなり頼りないものであった。また、テントウムシ類については、Fauna of British India も発行されておらず、東洋区のテントウムシ類は普通種ですら、同定するのにまとまった手がかりがなかったため、本書の刊行の意義は大きい。価格395フラン(邦価約15,000円)。

(福井大学、佐々治寛之)

## 台湾のシロスジカミキリ

黒沢良彦

最近出版された J. RIGOUT の Les Coleopteres du Monde I, Batocerini (1981) を見ていて、*Batocera holsfieldi* var. *variecollis* SCHWARZER の扱いについておかしなことに気付いたので、そのことについて記してみたい。まずこの扱いについて年代順に記すこととする。

1. B. SCHWARZER, 1925: Sauters Formosa-Ausbeute (Cerambycidae, Col.), Ent. Blätter, 21 (2), 60.

*Batocera lineolata* CHEVR. var. *variecollis* n. var. を記載した。Auping で1911年に採集された古い標本に基づいているが、模式標本の指定などは一切記述がない。記載には“Von den vielen Formen und Rassen von *lineolata* CHEVR. sehr gut unterschieden durch die Halsschildoberfläche:……”とあるので、これは亜種 (Rasse) のつもりで記載したものと思われる。この変種 (亜種) の特徴は後で詳しく述べる。産地の Auping は恐らく Anping の誤りで、これは現在の台南市安平で H. SAUTER 氏が一時居住していた所である。

2. M. MATSUSHITA (松下真幸), 1933: Beitrag, zur Kenntnis der Cerambyciden des Japanischen Reichs, J. Fac. Agr. Hokkaido Imp. Univ., 34 (2), p. 337.

*B. lineolata* CHEVROLAT (シロスジカミキリ) の分布に Formosa (Auping) を加えているが、var. *variecollis* SCHWARZER は全く無視されている。産地に Anping を誤りのまま引用しているのであるから、原記載は見ていることは確かである。

3. 三輪勇四郎, 1931: 台湾産昆虫分類目録 (鞘翅目), 台湾総督府中央研究所農業部報告 (55), p. 202.

*B. lineolata* var. *variecollis* SCHWARZER (シロスジカミキリ変種) がある。産地は Kosempo (甲仙埔), Shinkwa (新化), Suisha (水社) などが挙げられているのに安平はない。この変種の分布はもち論 Formosa になっている。

4. T. MITONO (水戸野武夫), 1940: Catalogus Coleopterorum Joponicorum (日本産鞘翅目分類目録) (8), Cerambycidae, p. 154.

*Batocera lineolata* CHEVROLAT var. *variecollis* SCHWARZER を掲げ、産地を Formosa としている。

5. E. GILMOUR & J. DIBB, 1948: Revision of the Batocerini (Coleoptera, Cerambycidae, Lamiinae), Spolia Zeylandica, 25(1), p. 90.

*B. holsfieldi* HOPE var. *variecollis* SCHWARTZER (ノ) の記載とその写真 (Pl. 5, fig. 7) があるが、命名者の綴りを誤り、記載は原記載とは異なる誤訳。おまけに、分布も台湾がブータンにすり替えられ、台湾はどこにも出て来ない。また、シロスジカミキ

リ *B. lineolata* CHEVROLAT の変種から *holsfieldi* HOPE の変種に所属を変更したのはこの文献が最初であると思われるのに、その理由の説明はどこにも見当たらない。あるいは、SCHWARZER とは別人の SCHWARTZER という人がブータンから偶然にも同じ *variecollis* という *holsfieldi* HOPE の変種を書いているかとも考えたが、原記載も同じ文献の同じ頁では、どうしても SCHWARTZER は SCHWARZER の誤と考える他はない。分布がブータンだけになっているのは、彼等が var. *variecollis* SCHWARZER に当ると考えたブータン産の 1 ♀ の標本が大英博物館にあるので、原記載などはすっかり忘れて分布をブータンだけにしてしまったお粗末な結果にすぎないと考えられる。従って、彼等の論文では、*lineolata* の分布にも *holsfieldi* の分布にも、どちらにも台湾は出て来ない。なお、巻末の 109 頁の目録でも *variecollis* SCHWARZER は *holsfieldi* HOPE の変種で、分布は Bhutan になっている。

6. L. GTRESSITT, 1951: Longicorn Beetles of China, Longicornia, 2, p. 407.

*Batocera lineolata* CHEVROLAT のシノニムの中に *Batocera lineolata* var. *variecollis* SCHWARZER, 1925 がある。分布も Formosa (Anping, etc.) とあり、Anping の出典は SCHWARZER になっているから、Auping が Anping (安平) の誤りであることに気付いていたものと思われる。また、GILMOUR & DIBB, 1948 の論文は確かに見ているのに、彼は var. *variecollis* SCHWARZER, 1925 を *lineolata* CHEVROLAT のシノニムとし、*holsfieldi* HOPE には含めていない。

7. S. BREUNING, 1962: Catalogue des Lamiinaires du Monde (Col. Ceramb.), (5), p. 394.

*B. holsfieldi* HOPE m. *variecollis* SCHWARZ. が出ているが、産地はない。*holsfieldi* の分布が、Inde sept., Birmanie となっており、Formosa が含まれていないので、GILMOUR & DIBB, 1948 に盲従したと見做してよいであろうが、*lineolata* の分布は Japon, Corée, Formose, Chine となっており、台湾にはシロスジカミキリを産し、*holsfieldi* は産しないことになっている。彼の m. は morpha のことで、亜種以下の範疇である。

8. J. RIGOUT, 1981: Les Coleopteres du Monde I, Batocerini 1, p. 110.

*B. holsfieldi* HOPE var. *variecollis* SCHWARTZER (Bhutan) とその特徴として “pronotal markings joined together in the front, leaving a triangular space” とある。これは GILMOUR & DIBB, 1948 の記述の丸写しで、命名者の綴りの誤りまでそのままである。面白いのはこの変種の独文の記述が上記の英文の直訳で、原記載の独文とは全

く異なることである。この部分に限らず、本書の内容は GILMOUNT & DIBB, 1948の丸写しであるから、後者の誤りをも丸写しにしていることになり、余り信用できない。

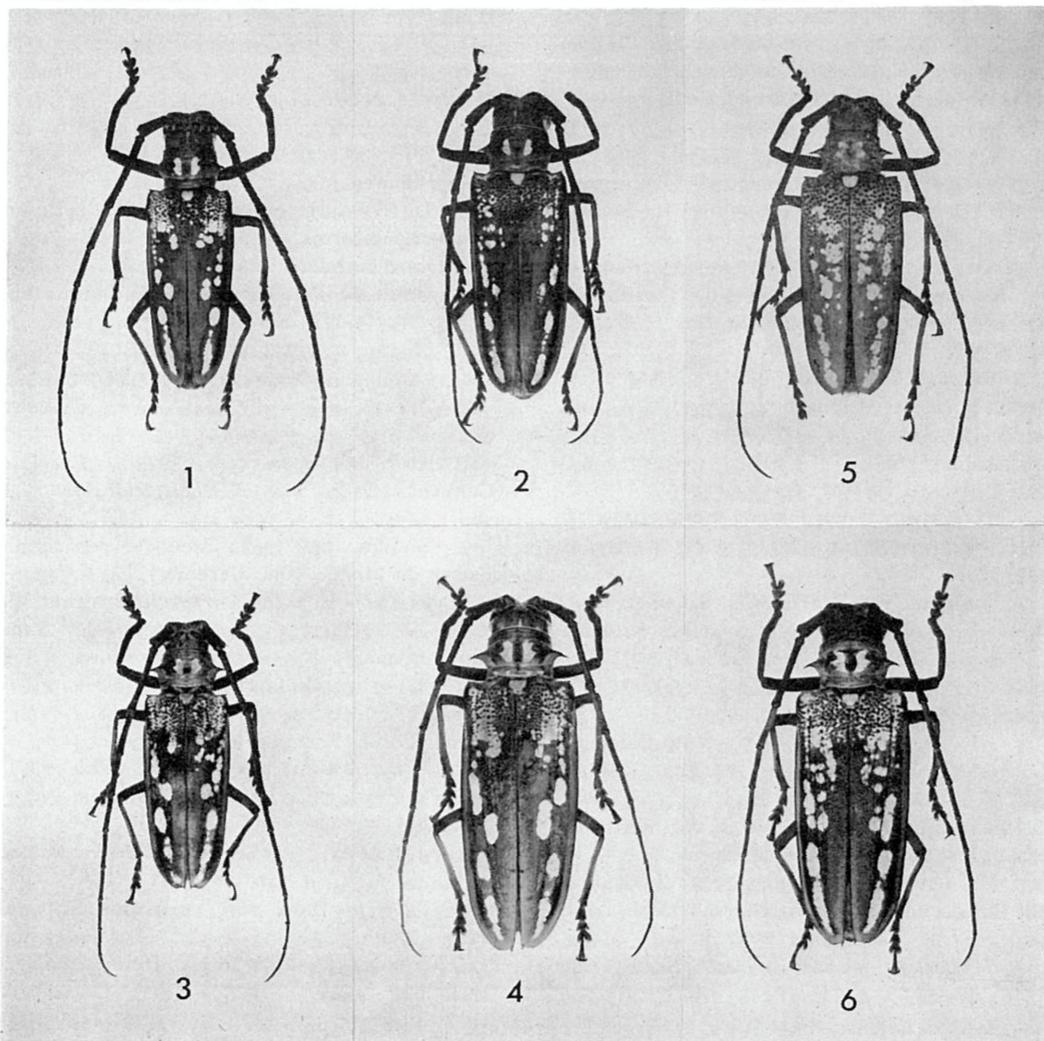
9. N. OHBAYASHI, 1981: New Species and Subspecies of Cerambycidae from Japan and Taiwan (Coleoptera), Ent. Rev. Japan, 35, p. 47.

台湾南投県霧社産の2♀♀に基づいて新種 *Batocera ushijimai* を記載し、*B. lineolata* と *B. holsfieldi* との相異について述べている。

さて、SCHWARZER, 1925の *Batocera lineolata* CHEVR. var. *variecollis* の原記載は次の通りである。

Von den vielen Formen und Rassen von *lineolata* Chev. sehr gut unterschieden durch die Halsschildoberfläche: die beiden Nieren-flecken

(beim vorliegenden einzigen ♂ leider durch die Konservierung stark verblichen) sind nur an der Basis durch eine glatte rundliche Makel getrennt, an den Vorderseiten der Nierenflecken je eine ebensolche rundliche glatte Makel, so dass auf der Dorsalfäche des Halsschildes 3 glatte schwarze, in einem Dreieck stehende, etwas erhabene Makeln auffallen. Die Basalpartie der Decken ist nicht sehr dicht (hinter den Schultern dichter) granuliert und zum grössten Teil mit weisser Pubeszens gefüllt: die folgenden weissen Flecken sind rundlich oder langoval, die vor der Spitze lang bindenförmig; nur wenig oder keine Bieflecken. Die Deckenspitze ist an der Naht kurz bedornt, daneben ausgerandet,



シロスジカミキリ: 1. 日本産 (♂); 2. 徳之島産 (♀); 3. 台湾知本産 (♂); 4. 台湾旧ハボン産 (♀); 5. アッサム Naga Hills 産 (♂); 6. アッサム Khasi Hills 産 (♀)

aussen nur mit einer Ecke, kaum gezähnt. Die Fühler überragen die Decken mit der Spitze des 8 Gliedes und sind, wie die Vorderbeine relativ sehr wenig scabrös, letzte Glieder beinahe glatt.

Auping 1911.

これに対し, GILMOUR & DIBB, 1948 の var. *variecollis* についての解説は次の通りである。

This variety differs from the typical form mainly by the shape of the thoracic markings. These are much broader and join together at their inner anterior angle, and thus enclose a smooth triangular central area, making it quite distinctive.

The granulation at the base of the elytra is similar to that of the typical form, but suturally the tubercles tend to be more flattened, and transversely linear in shape.

The ground colour is black, densely covered with grey pubescence, the white markings are rounded or elongated, the latter particularly at the apex. The sutural apex of the elytra is slightly spined, the marginal is more round, very slightly angular.

Length: 54mm.

Locality: Bhutan.

Material Examined: Brit. Mus. Nat. Hist. ... 1 female.

両者の記載を比較してみると, 胸部背面の紋についても, 翅鞘基部の顆粒についても, 其他翅端の形状についても, あらゆる点において異なっている。原記載には前胸背の2紋は後方におのおの円紋を分離し, 先方で両紋は合一し円形となって, あたかも3個の三角形に位置する黒紋(古い個体であるので白紋がよごれて黒くなっている?)がある様に見える。とあるのに, GILMOUR & DIBB は2紋は大きく, 前方で合一し, その間に三角形の平滑部を形成すると異った解釈をし, これに合致するブータン産の標本を大英博物館の所蔵標本の中に発見して, これを *variecollis* と決めてしまっている。他の部分の記載もこの標本の記載であって, 台湾の *variecollis* の記載ではない。当然 SCHWARZER の記載などはどうでもよく, 産地もブータンとなってしまったわけである。

GILMOUR & DIBB, 1948を見ていてもう一つ気付いたことは, 記載と検索表では一応 var. と ab. を区別しているのに, 巻末の図版の説明ではこれらは全部三命名式の亜種扱いであることである。どうやらこの著者等には亜種, 変種, 個体変異の区別がつかないらしい。また, 上に記した様に, この著者等はろくに原記載に当ることなく, それまでの慣行に従って変種, 異常型などを決めてしまったのではないかと推察される。従って, 彼等の記したことをそのまま鵜呑みにすると大きな誤りを犯すことになるのではなからうか。現に, BREUNING も RIGOUT

も共に彼等の記述を鵜呑みにしたために *B. lineolata* CHEVROLAT var. *variecollis* SCHWARZER の正体を誤認し産地をブータンなどととんでもない所にしてしまったのである。

それでは台湾のシロスジカミキリは, 日本の研究者や GRESSITT の扱いの様に *lineolata* CHEVROLAT に属するものであるのか, あるいは GILMOUR & DIBB やこれに従った BREUNING や RIGOUT の扱いの様に *holsfieldi* HOPE に属するものであるのかが問題になって来る。*B. holsfieldi* HOPE, 1839 はネパールからシッキムを経てブータンに至るヒマラヤ山脈の東南麓からアッサム, ビルマを経てラオス, ベトナムなどのインドシナ半島北部山岳地方に, また一方では中国の雲南省を経て四川省に達している。一方, *B. lineolata* CHEVROLAT, 1852 は中国の上海から記載された種類であるが, 日本(本州, 四国, 九州, 佐渡), 朝鮮, 濟州島, 琉球(奄美諸島), 台湾にも産する。中国では, 江蘇, 安徽, 湖北, 湖南, 江西, 浙江, 福建, 広東, 広西などの諸省, 主として揚子江以南の山岳地帯に広く分布しているが, 河北省北京という北の記録もある。その分布の西南部においては *holsfieldi* の分布域に接しているが, 両種が重複して産する所はない。

両種はほとんど同様の斑紋, 色彩, 体形を持ち, これらの点から両者を区別することはほとんど不可能である。GILMOUR & DIBB によれば一般に *holsfieldi* の方が *lineolata* に較べて地色が強く灰色を帯び, 体がより太めで頑強であるという。しかし, これらの点はいずれも程度の問題で, 両者を判別する特徴にはなり難い。また RIGOUT によれば, *lineolata* は *holsfieldi* に較べて, 地色が暗く, 小型, 翅鞘の白斑は大きく基部の顆粒状部の中にまで拡大するとあるが, 上記の通り体色は変化が多く決定的ではなく, RIGOUT 自身が示した体長も *holsfieldi* が 45~67mm, *lineolata* が 40~73mm で, どうして *lineolata* の方が小型としたか理由が解らない。翅鞘の白斑も私の検したアッサム産の *holsfieldi* と思われる標本(1♂1♀)は共に顆粒部の中に白斑が侵入していた。GILMOUR & DIBB, 1948 や GRESSITT, 1951によれば, 両者を区別する唯一の特徴は, 翅鞘基部の顆粒部の状態で, "the elytra with rather large tubercles at the base" が *holsfieldi* HOPE で, "the elytra very finely and densely granulate at the base" が *lineolata* CHEVROLAT であるという。しかし, 私の検した日本産多数, 台湾産 1♂1♀, 中国湖南省産 2♀♀, アッサム産 1♂1♀についていえば, 顆粒の大小や散布状況に多少の粗密はあるがアッサム産と日本産の間にほとんど有意の相違は見出せなかった。また, L. GRESSITT, 1955によると "elytra with large granules basally, about 10 in a row across base of disc of each" が *holsfieldi* で "elytra with small granules basally, more than 14 in a row across base of disc of each" が *lineolata* である。ここでは各翅鞘の基部に並ぶ顆

粒の数が問題になって来るが、私の手許のアッサムの Khasi Hills 産の 1 ♀ は 15~17, Naga Hills 産の 1 ♂ は顆粒が多少粗大であるが、数はやはり 14~17 と大差がない。また他の地方のものも大差なく、これによって両者を区別するのは不可能である。ただ翅鞘基部の顆粒の状況からすれば、私の手許にある Naga Hills 産 1 ♂ と同じアッサムの Khasi Hills 産の 1 ♀ の間の差の方が日本や台湾産の標本間の差よりも著しく、翅鞘肩部の外側部の上側板 (epipleuron) 上の顆粒が日本、中国、台湾および Khasi Hills 産 (1 ♀) のものは細かく密で多少とも融合する傾向があるが、Naga Hills 産 (1 ♂) では粗大で全く融合することがない。しかも、後者は体を覆う毛が強く灰色を帯び、この点でも GILMOUR & DIBB の記述に一致する。もし、仮に後者、Naga Hills 産が *holsfieldi* に当るものと仮定すると、Khasi Hills 産のものは *holsfieldi* ではなく *lineolata* に属することになる。ここで思い当るのは AURIVILLIUS, 1922 の JUNK の甲虫目録 (73) の中の扱ひである。彼は *B. adelpha* THOMSON, 1859 を *lineolata* の var. とし、産地をアッサムと南ヒマラヤとし、*holsfieldi* はアッサムとして両者を区別しながら、アッサムには両者を産する様に記している。一方、GILMOUR & DIBB は *adelpha* の模式標本は ♀ で、翅鞘基部の顆粒の状態は *holsfieldi* (模式標本は ♀) と変らないとして、前者は後者のシノニムで *lineolata* ではないと記している。これらの記述と

#### ○ヒゲトハナムグリの神奈川県における記録

神奈川県に分布するコガネムシについては神奈川県昆虫調査報告書にまとめられたが、その中に記録のないヒゲトハナムグリ *Amphicoma pectinata* LEWIS を採集しているので報告しておく。

神奈川県津久井郡三ヶ木: 10 ♂♂, 18. v. 1979; 12 ♂♂ 1 ♀, 22. v. 1979; 3 ♀♀, 31. v. 1979; 6 ♂♂, 23. v. 1980. すべて筆者採集。

三ヶ木において本種は雑木林に接した草地を中心に局地的に分布する。また発生期は 5 月中旬~下旬の約 2 週間と短い。

尚、本種は高尾山南東部の山麓でも採集されており、津久井湖~高尾山付近にかけて広く分布するものと推測される。

文末ながら日頃から色々とお知らせ下さる石田正明先生にお礼申し上げます。

(神奈川県海老名市, 和田 薫)

#### 昆虫の器具は「志賀昆虫」へ

日本ではじめてできた有頭昆虫針!!

1, 2, 3, 4, 5 号 (各号 100 本 180 円)

なお、有頭針 00, 0 号もできました。その他、採集、標本整理用各種器具も取揃えてあります。

〒 150 東京都渋谷区渋谷 1 丁目 7-6

電話 (03) 409-6401 (ムシは一ばん)

振替 東京 21129

志賀昆虫普及社

私の手許の標本とに基づけば、どうやらアッサムには 2 種のシロスジカミキリを産し、一方は *holsfieldi* で、他方は *lineolata* であるが、この点に関してはもっと多数の標本を見ない限り決定することはできない。もし、両者が連続し、同一種内の変異であるとすれば、*holsfieldi* HOPE, 1839 は *lineolata* CHEVROLAT, 1852 に先行するので、後者は前者のシノニム (または亜種) となり、シロスジカミキリの学名には *Batocera holsfieldi* HOPE, 1839 を用いなければならない。

さて、話を元にもどして、台湾産のシロスジカミキリは、私の手許にある 1 ♂ 1 ♀ (1 ♂, 知本, vii. 1929, 鹿野忠雄採集, 1 ♀, 旧ハボン, 26. vii. 1927, 鹿野忠雄採集) に関する限り、完全に *lineolata* で *holsfieldi* ではない。また、日本産に較べ、前胸背側縁中央の棘が著しく強大で長く、時には後方に湾曲する点で異なるので、一応別亜種として区別し、亜種名に *variecollis* SCHWARZER, 1925 を用いるのが妥当ではないかと思っている。

最後に、最近台湾から大林延夫氏によって記載された *B. ushijimai* N. OHBAYASHI, 1981 について触れてみたい。氏はこの種を *lineolata* や *holsfieldi* から区別する若干の特徴を、写真を添えて挙げているが、いずれも、私には、独立種とするには根拠が薄い様な気がする。しかし、模式標本を検したわけではないので、これ以上の言及は避けたい。

(国立科学博物館)

#### ○北海道のニッコウミズギワゴミムシ (ミズギワゴミムシ分布資料 2)

ニッコウミズギワゴミムシ *Bembidion misellum* HAROLD は従来本州と九州より知られ、主に低山地の沢の水辺や落葉下などに普通にみられる。

筆者は本種を北海道渡島半島の江差町において採集している。北海道における本種の記録がみあたらないためここに報告しておく。

2 ♂♂, 4 ♀♀, 松山支庁江差町, 5. vi. 1977.

(東京都港区, 森田誠司)

#### 甲虫談話会

会費 (一ヶ年) 2000 円, 次号は 3 月 31 日発行予定。

発行人 黒澤良彦

発行所 甲虫談話会 東京都台東区上野公園

国立科学博物館動物研究部内

電話 (364) 2311, 振替東京 0-60664

#### タツミの昆虫採集器具

ドイツ型標本箱 木製大 ¥ 5,000, 桐合板製インロー型標本箱中 ¥ 1,500, 送料一箱につき国内及第一地帯: 3 個以下 ¥ 1,300, 4 個以上 ¥ 850 (以下同様), 第 2 地帯 ¥ 1,500, ¥ 950, 第 3 地帯 ¥ 1,700, ¥ 1,050, 其他, 各種器具, 針などを製作販売しています。カタログを御請求下さい。(¥ 160)

#### タツミ製作所

〒 113 東京都文京区湯島 2-212-25

電話 (03) 811-4547, 振替 6-113479